

---

# IS 《オリ主削減計画》

遅筆者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 《オリ主削減計画》

### 【Nコード】

N9662V

### 【作者名】

遅筆者

### 【あらすじ】

増えすぎたオリ主に頭を悩ませた神様は一つの計画を打ち建てる。

その名も《オリ主削減計画》

みんなの嫁、守ります。(前書き)

いまだによくわからない投稿の仕方。

章はどうやって変えるの？  
誰かkws k。

みんなの嫁、守ります。

梅雨が終わりすごくしやすく気持ちの良い午後。

俺は死んだ。

死んだ時のことは覚えている。

バイクに乗っていたら対抗車線からトラックが突っ込んできて正面衝突した。

宙を舞いながら可もなく不可もないつまらない人生だったな、と思  
い、固いアスファルトに叩きつけられて、意識を失った。

そして今。

白い…目が痛くなる程に真っ白な場所にいた。

転生か？『そうだよ。』…！？

誰だ？

『神様』

本当に？

『本当に』

なぜ思っている事が分かる？

『今の君には肉体がないからね。言ってみれば魂だけみたいな存在だから直接君の意識を見ているんだ。それに此処には音が存在しないしね。』

俺は、どうして此処に？

『君には異世界に転生してもらいたい。』

異世界？

『そう。君のいた世界とは別の…僕が管理する世界。』  
インフィニットストラトス  
ISという物  
語によく似た世界に。』

なぜ？

『最近その世界に転生してくる人が多くてね。世界が弱ってるんだ。』

世界が弱る？

『うん。世界っていうのは言ってみればひとつの大きな生命体でね。人や動物は中に住む細菌みたいな存在なんだ。そして世界を管理し、バランスを整えているのが僕たち、神様みたいな存在。それで、転生してくれるかい？』

具体的に何をするんだ？

『…慎重だね。なに、簡単だよ。転生者を殺せばいい。』

そんなこと…

『できるだろう？大量殺人をやったのけた君なら。』

…できるに決まっている。

『そう言ってくれると思ったよ。殺すのは男が65人女が18人だよ。』

…多いな。道具と報酬は？

『殺りがいがあるだろう？道具は行けばわかるよ。報酬は新しい世界の神様にしてあげる。どう？』

いいだろう。やってやる。

『さっそく送るけどその世界にもとからいた人はできるだけ殺しち

やダメだよ？でもバランスをとるのが目的だから原作は無視していいよ。』

分かった。

『じゃあ、よろしく頼むね。』

その言葉の後すぐに意識が白く染まり…よくわからなくなった。

意識を取り戻すと宇宙にいた。

呆然としながらも現状を把握しようとして周りを見渡す…？

見渡すというより視界が切り替わった感じに違和感を覚える。

『やあ、調子はどう？』

これは一体どういう事だ？

『うん、君を転生させると他の奴等と同じになって意味がないからね。月と地球の間…ラグランジュポイントにあった資源衛星に巨大なコンピュータを創ってね、そこに君を入れた。』

コンピュータにどうしろと？

『大丈夫だよ。色んな世界の知識を君のデータベースに入れたし、小さいけど工場ファクトリーも創った。材料は周りにたくさん浮いてるだろう？』

…なるほど、分かった。やってみよう。

『じゃあ、後は頑張つてね。因みに原作の時間で言うと今はまだ束の母親が16歳だから時間はたっぷりあるよ。』

分かった。

『それじゃあ、またね。』

声が聞こえなくなったのでデータベースにある『知識』を試してみる。

これは……、と思わず考え込む。『知識』に入っていたのは以前、まだ生きていた頃、マンガやアニメでみた兵器や武器、またはこの世界ではまだ発明されていないISの技術が詰まっていた。

その後も、自身のデータベースを読みあさっていくと、かなり深い領域に自らの宿るコンピュータのスペックが記録されたフォルダを発見した。

それによるとこのコンピュータは簡単に言うと000のヴェーダとナデシコの想い鐘とルリちゃんを掛け合わせたものらしい。

自分があまりにもハイスペックだったことに驚いた。30分あれば



地球まるごとクラッキングできるってどんだけだよ。

…気を取り直して工場ファクトリーの入り口にある長いロボットアームを操り、偶然近くを漂っていた古いロケットのエンジンや廃棄された衛星を取り込む。

まずは作業機械が欲しいな、と考え作り上げたのは一年戦争で活躍したボールである。今は必要ないので非武装だがいつかは付けたいと思う。

自動操縦で《ファクトリー》から出ていったボールは一時間ほどしてから2メートル位の資源衛星を五つ、牽引してきた。

衛星をファクトリーで分解し新たにボールを2機作る。

推進剤は使用せずにイオンエンジンだ。パワーはないが仕方ない。

そんなこんなでボールをねずみ算式に増やす。最終目標は三十機だ。

三十機目を生産しつつ、小型の作業機械もつくる。見た目は八口にロボットアームをつけたものだ。

こいつらは俺のいる衛星の整備や、ボールにできない精密作業をする。緊急用に口からトリモチを発射できる。

遊び心で原作みたいに発声装置をつけたら『ハロ、ハロ』とつるさい。

とりあえずこいつらはワーカーハロと名付け、六十機生産。

少し余裕ができたのでボールに火器をつける。

通常タイプと近接タイプ、そして機雷散布タイプだ。

俺のいる衛星を要塞化するために光学迷彩、ミラージュコロイド発生装置、CIWSを設置。

そしてそれらのシステムを支えるエネルギーを生産するため、ミノフスキー粒子をまきながらソーラーパネルを作る。

作りながら考える。

今は何とか誤魔化しているがここでは確実にばれる。

彼は、火星軌道へのボソソジャンプを決定、地球圏より姿を消した。

そして時が立ち原作開始の十年前。

『彼』は《オリ主削減計画》の発動を全てのシステムに通達した。

## 第2話（前書き）

まだまだ下手くそですがどしどしお付き合います。

## 第2話

まずは、火星の豊富な資源を使い、作りあげたジオン艦隊を発進させる。

だが原作開始までは隠したのでフルメタルパニックのECSを不可視モードで全艦につけ、起動させる。

ちなみに、現在『彼』は自身のいる衛星をかえ、巨大な要塞にあつた。

どこか巻き貝を思わせるその要塞の名は『メサイア』という。

さて、『メサイア』を発したジオン艦隊の詳細は、

ドロス級	2
グワジン級	15
ザンジバル級	58
ムサイ級	135

そしてさらにそれらを支えるパプア級やパゾク級が計120隻の大艦隊である。

そしてメサイアには

ドロス級：1  
グワジン級：10  
ザンジバル級：30  
ムサイ級：100

で形成される防衛艦隊が残った。

そして艦載機としてのMSだが、18mはISに対して大きすぎる。

そこで、一部例外を除き、MSは全て5m程になった。

これらの艦、MSは全て無人機である。

人がいないということはそれだけMSを多く積めるといふ事である。

整備などはワーカーハロやボールが行う。

つまり、只でさえ大量に艦載MSがあるのにまだ余裕があるのである。

ジオン艦隊の最大戦力は本来の倍、それ以上になった。

## 第2話（後書き）

これはひどい。

問題があったら遠慮なく指摘を。

誹謗中傷はつけつけませぬ。

### 第3話（前書き）

今回ちょっと長いです。

お付き合いを。



### 第3話

地球圏にジオン艦隊が到着すると丁度あの『白騎士事件』が起こる3日前だった。

そこで『メサイア』はジオン艦隊に指令をだす。

内容は

《白騎士事件に出しゃばってくる阿呆共を殲滅せよ。なお、白騎士には接触するな。》

これを受け、ジオン艦隊はザンジバル級を一隻派遣。

ザンジバル級はボソソジャンプを行い、太平洋に面する孤島に跳んだ。

ザンジバル級はすかさずECSを起動し、隠密行動に入る。

《白騎士事件》2日前のことである。

そして、《白騎士事件》前夜。

ザンジバル級からMS隊が密かに出撃した。

人型ではない、ずんぐりとしたフォルムが多く見つけられる。

それは『ズゴック』『ゴック』『ゾック』『アツガイ』『ゾノ』  
『グーン』等の水陸両用MSの混成部隊。

MS達は水中で潜航しながら三機小隊を組んでいく。

そして次々と夜の海に消えていった。

そして《白騎士事件》当日。

Side ザンジバルAI

〔世界規模のハッキングを確認〕

〔空中戦用MS隊の発進シーケンスを開始〕

〔各国ミサイル、目標を日本国に設定〕

〔空中戦用MS隊の発進シーケンスを省略〕

〔各機、順次発進〕

〔日本国よりISの発進を確認〕

〔発進したISは五機〕

〔内一機を《白騎士》と断定〕

〔残り四機を《ENEMY》？．？．？．？．？．？．に認定〕

〔《ENEMY》？．？．の《白騎士》への接近を確認〕

〔空中戦用MS隊発進完了〕

〔水陸両用MS隊の《ENEMY》への攻撃を許可〕

〔空中戦用MS隊の《ENEMY》への攻撃を許可〕

〔《白騎士》がミサイル迎撃を開始〕

S i d e o u t . . . . .

少し時間をさかのぼる。

ザンジバル級から発進した空中戦用MS隊は『ムラサメ』『イナクト』『フラッグ』の混成部隊。

発進すると瞬時に小隊を組み、最大戦速で攻撃に向かう。

Side 転生者

待ちに待った白騎士事件！

ここでちーちゃんにカッコいい印象を与えてフラグゲットだ！！

俺のIS『黒薔薇』は余裕で音速に達し、ちーちゃんを探す。

……！

見つけた！！

ちーちゃんに接近するために減速し曲がろうとした瞬間。

『黒薔薇』の右手と左肩のユニットが吹き飛んだ。

Side out…….

水中から顔を出した『ゾック』の四門のメガ粒子砲が《ENEMY》  
《？》に命中。

動揺した《ENEMY》？に直上から変形したイナクトが急接近。  
減速せずに蹴りを叩き込む。

《ENEMY》？は悲鳴をあげながら落ち、水面ギリギリで何とか止まる。

蹴ったイナクトを睨み付け、左腕にビームバルカンポッドを召喚。

イナクトを撃つと、ビームバルカンポッドを構えた瞬間。

水面を割って現れたゴック二機に水中に引き摺り込まれた。

Side 転生者

な、なんだコイツら！

黒薔薇のおかげで生きているが第二世代機だったら確実に死んでいた。

奴らは俺の周りを球形を描くように泳いでいる。

迂闊に動けない。

さっき水面に出ようとして360°から魚雷とビームの雨を浴びた。

海の中なのに雨を浴びるとはこれいかに

馬鹿な事を考えている暇はない。

赤い目を光らせてこっちを狙う姿はトラウマになるな…

シールドエネルギーは30%を切った。

敵にはまだ一撃もいれてない。

覚悟を決めた。左腕から何時でもビームソードを出力できるようにして、こちらを見ているあの赤い機体に狙いを定める。

全速力。せめて一矢報いるために赤い機体突っ込む。

ビームや魚雷が向かってくるがビームはかわし、魚雷は追いつけない。

赤い奴まで五メートル!!

決まったと思い、ビームソードを出力する。

が出ない。

いや、出ているが水で拡散している!?

警報。

目の前には赤い機体。

その爪は、わずかなシールドを俺の身体ごと貫いた。



S i d e o u t . . . . .

( まずは一人目。 )

『メサイアの俺』と直接リンクしたシヤア専用ズゴックで胸を貫かれた転生者は驚愕の表情のまま沈んでいく。

フォノンメーザーとビームを見分けられなかった辺りこっついうものに詳しくなかったらしい。

海面に目を向け、残りの三機を殺すために動き出す。

シヤア専用ズゴックからリンクを切り、《ENEMY》? ・と交戦しているバルトフェルド専用ムラサメと繋げる。

《ENEMY》? ・は白い機体に赤いラインが目立つ。武器は足にミサイルを合計十発に大剣。大剣からはビームの刃がとぶらしい。

だがこれまでの戦闘でミサイルは使い果たし、シールドエネルギーは50%を切っている。

…一気に畳み掛けることにした。

MA状態のムラサメで突っ込む。

相手が気付く前に66A式空対空ミサイル“ハヤテ”を発射。

《ENEMY》？が気付き、ビーム刃を放つ直前、フラッグが“ハヤテ”を撃ち抜き、爆発がおこる。

爆煙に紛れながら変形。

腰の70J式改ビームサーベルを引き抜き、爆煙を抜ける。

放たれたビーム刃をシールドを投げつけ相殺。

加速し、左手で《ENEMY》？の顔を掴み、恐怖に歪む顔にどこか快感を覚えながら、その胸にビームサーベルを突き立てた。

しばらくシールドと反発しあっていたが十秒程で押し切った。

《ENEMY》？　から力が抜け、ISも消えた。

《ENEMY》？　だった物を投げ捨てながら、ムラサメとのリンクを切った。

《白騎士》はこちらには気付いているがミサイルの対処に忙しいらしい。

あのと、サーシエス専用イナクトで二刀流の《ENEMY》？　と交戦。

一対一の熱戦を繰り広げ、相手が大技を放つような型に入ったので、全MSの集中砲火を食らわせたなら卑怯者オ！とか言いながら爆散した。

《ENEMY》？・は大火力機だったらしいが機動力がそれ程でもなかつたらしく、グラハム専用フラッグにリンクを繋いだら十字砲火の真ん中で亡国企業めえ！とか言いながら爆散してた。

全MSにザンジバル級への帰投を命じ、浮いている《ENEMY》  
？．？．？．？．の頭にリニアガンを撃ち込み、死亡の確認を済ませる。

さて、帰ろうと機体を振り向かせると《白騎士》がいた。

ふしつぽ。

,

### 第3話（後書き）

戦闘描写ムズッ。

フォノンメーザー砲って光出たよね？

あれ？でもあれ音波砲……。

次回はちーちゃんパネエっていうお話。

## 第4話(1)(前書き)

話を分けることにしました。

## 第4話(1)

振り向くと《白騎士》がいた。

仮面から機体まで白。違う色といえば仮面からはみでる黒髪くらいだろ。

対するこちらは悪魔のように全身真っ黒。

3メートル程の純白の騎士と五メートルの悪魔。

騎士が言葉を発する。

『何者だ。』

ここで話すのは得策じゃない。

逃げるか？



ザンジバル級はMSの回収を終えたらしい。

策を考え、ザンジバルのAIに伝える。

それにAIは忠実に従い、実行する。

『…………ツ!?!』

痺れを切らしたのか言葉を発しようとした瞬間。ザンジバルからミサイルが放たれる。

騎士には何もない所からミサイルが出てきたように見えただろう。

騎士はこちらを睨むと、迷わずミサイルの迎撃に向かう。

騎士は向かってくる長距離用ミサイル四発の前に立ち、剣を構える。

一発目。擦れ違いざまに信管をミサイルから切り離す。

二発目。これはわざと切り裂き、爆発する前に蹴りとばす。

三発目。進路上にくの字に曲がった二発目のミサイルが現れ、爆発。  
この爆発に巻き込まれ三発目も誘爆する。

四発目。騎士は剣を正眼に構える。ところがミサイルは突然先が割  
れ、中から子爆弾がばらまかれる。

爆発。爆煙。

爆煙が消えると、傷一つどころか汚れ一つない騎士。

だが悪魔は影も形もなかった。

『…………逃げられたか。』

フラッグを回収したザンジバル級はボソソジャンプでジオン艦隊へ

帰還していた。

《白騎士事件》の間にジオン艦隊は月のクレーターに基地建設を進めていた。

月の裏側のクレーターの一つ。ボールやワーカーハロにザク？がせつせと働き、クレーターの左右にドロス級が停泊し、周りをグワジン級やザンジバル級、ムサイ級が輸送船団を守るように陣取る。

三時間に一度、ムサイ級三隻で一つの戦隊とし、五つの戦隊が巡回に出る。

警戒しすぎかも知れないがこれでいいのだ。

今はまだ大丈夫だが、ISが発表されたのだ。これから地球の宇宙開発はかなり発展する。

言ってみればAIの訓練のためである。

基地建設を行ったのは以前から検討していた大型MAの開発をするため。

基地の運転開始は来年秋、大型MAの完成は原作開始には間に合うだろう。

それまでのジオン艦隊の主な任務は、

・オリ主の削減

・各国政府への諜報

・亡国企業の調査

・一夏をはじめとする原作キャラの護衛

である。

オリ主の削減は元からの任務。

各国政府への諜報は手札を一枚でも増やすため。

亡国企業の調査は、亡国企業にオリ主が何人か協力している可能性があるためだ。

そして最後の原作キャラの護衛とはオリ主介入によって、何が起きるか分からないからである。

亡国企業や、マッドサイエンティストなオリ主、最悪はロリコン、シヨタコン、ペド野郎。

実際のところ、これは釣りだ。

原作キャラという餌をたらし、オリ主や社会不適合者を釣り上げる計画。

原作キャラの護衛にはたえモブキャラでもフル装備のザク？F2型が二機は着くし、主要キャラになるとゲイツやザクウォーリア、M1アストレイの一個小隊が護衛する。

各種諜報は『メサイア』のハッキングで慎重に調査する。

下手をしてジョーカー（東）でも引けば只では済まないだろう。

護衛部隊は護衛小隊と遊撃隊に別れる。

《白騎士事件》の時、ザンジバル級が着陸した島を、『メサイア』によるハッキングで《誰も手を出さない島》にする。

その島にザンジバル級が五隻到着。

護衛小隊は即座に出撃。

護衛を開始。

遊撃隊の戦力は

グフカスタム…12機

フラッグ…15機

イナクト…15機

デイン…15機

ストライクダガー…15機

そして、ドダイ改や各種ストライカーである。

『メサイア』ではオリ主の登録されていないコアに反応するリーダー

の開発を進めているがなかなか上手くいかない。

なのでこんな《釣り》をしなければならぬ。

護衛開始から二日目。

幼いシャルロット・デュノアのもとで事件が起きた。

もとよりシャルロットは人気な為、護衛も豪華だ。

スラツシュザクフロントム…1機

ブレイズザクウォーリア…2機

ジンハイマニューバ2型…3機

ジムスナイパー？…2機

である。

主要キャラでも安全性はトップクラスだ。

そこに男が来た。

赤い長髪に整った顔。

右手にはおそろくISだろう。赤い指輪をしている。  
そして金と銀のオッドアイ。

疑うまでもなくオリ主だ。

あの花畑に一人立つシャルロット。

幼いシャルロットに近づく男。

少し怯えながら警戒するシャルロット。

照準を男の心臓と頭に合わせるジムスナイパー？。

既に抜刀しているジンハイマニューバ2型。

いざというときは盾になるべくスラストを噴かすブレイズザクウ  
オーリア。

スラッシュウィザードのガトリングが回転し、ビームアックスを構  
えるスラッシュザクファントム。



そして男は口を開いた。

「おい！お前！」

ビクリと肩を震わせながら答えるシャルロット。

「な、なんででしょうか？」

男は言い放った。

「俺様と結婚しろ！！」

「いやです」

シャルロットバツサリ。

断られると思わなかったのだろう。男茫然。

おめでたい頭だ。

シャルロットはこいつと二人きりは危険と判断したのだろう。

その場を離れようとする。

「…オイ、待てやゴラ」

男の右手の指輪が光り、次の瞬間には赤と黒のISが展開されていた。

「あ、あいえす…」

シャルロット茫然。

そして喋りだす男。

「俺様がせっかく嫁にしてやるつってんのに、いやです？何様だてめえ！？」

「そ、そんなの…」

「あゝあゝ？誰が喋っていいつつたよ？くそガキが！！少しかわいいからって調子のもってんじゃねえぞオ！！」

「ひっ…」

「泣いてんじゃねえよ！『カルマ』！レールガンだ！！」

原作キャラには接触しなくなかったが…

仕方ないよあ。

男の手に白い銃が召喚される。

「死」

叫んでいる男の頭にジムスナイパー？の攻撃が炸裂する。

「きゃ、」

ジンハイマニューバ2型がすかさずシャルロットを抱え、男から隠すようにしながら跳びすさる。

男は逃げるジンハイマニューバ2型を撃とうとするがそこにジムス

ナイパー？の射撃が入る。

男はジムスナイパー？を潰そうと思ったらしい。

ビームでできた刀を召喚すると、イグニッション・ブーストを使い、突っ込んできた。

「死にさらさ

」

男が叫んでいるが、そこにブレイズザクウォーリアがミサイルを発射。

男はミサイルの群れと正面衝突し、吹き飛ばされた。

「ぐあっ！……なめんじゃねえぞ

」

またも男は何か言おうとしたがその頭と胸にビームの雨が降る。

ビームガトリングの射撃を加えながらスラッシュザクフロントムが急速接近。

その胴にビームアックスを横風ぎに叩きつけ、男はまたも吹き飛ば

吹き飛んだ先には2機のジンハイマニューバ2型が。

抜刀していた刀を2機で左右から野球のように横風ぐ。

ズギヤッ！という音とともに男は斜め上に弾け飛び、そこにさらに

もう一機のブレイズザクウォーリアからミサイルが放たれる。

全弾命中。男が爆煙から吹き飛ばされ、その先にはビームアックスを振りかぶったスラツシユザクファントムが。

ビームアックスの一撃で地面に叩き落とされた男のISはシールドエネルギーが切れ、指輪に戻る。

「く、クソ共があー！！覚えてろよ！！」

小物臭い言葉を吐くと、男は逃げていく。

腕が折れたのか、右手を押さえながら涙目だった。

「あ、あの…」

ジンハイマニューバ2型が抱えているシャルロットが声を発した。

そちらにモノアイを向けるとビクリと震える。

ジンハイマニューバ2型に彼女をおろさせ、撤収の準備をする。

煙幕の用意をジムスナイパー？にさせ、シャルロット・デュノアに向き直る。

「あ、ありがとうございます。」

その言葉に一度頷くと、ジムスナイパー？が煙幕弾を撃ち出し、辺りが白煙に包まれる。

「ま、まって！」

その言葉を見殺し煙幕に紛れながらECSを不可視モードで展開。離脱する。

煙幕が消えるとそこにいるのはシャルロット・デュノアだけだった。

Side 転生者

クソ！クソ！！

クソクソクソクソオ！！

何なんだあいつらは！

後少してシャルロットは俺様の物になる筈だったのに！！

何がいけなかつたんだ！

俺様は悪くない。

悪いのはあのくそガキにクソロボットだ！

それにこの俺様のIS『カルマ』がクソだからだ！

そうだ。

帰ったらあのバ神を脅して最強のISを貰おう。

そしてあのクソロボット共を粉碎してやる！

シャルロットは犯してやる！

俺様をコケにしたんだ当然の報いだ！！

折れた右腕の痛みで顔をしかめる。

だが、泣き叫ぶシャルロットの顔を思い浮かべ、ニヤリと笑った瞬間。

右腕が吹き飛んだ。

S i d e o u t . . . . .

もとよりヒーローになっただつもりはない。

だが子供の見ている前で人を殺すわけにはいかないだろう。

ジムスナイパー？の射撃が男の右腕を付け根から吹き飛ばす。

悲鳴をあげながら左に倒れようとするオリ主。

だが左からECSを解除しながらストライクダガーが現れ、オリ主を蹴りとばす。



とばされた右腕のISを踏み潰し破壊しながら、グフカスタムがストライクダガーを3機引き連れ現れる。

「な、なんだテメエ」

何か喚いている口を蹴りとばす。

その後はひたすら殴り、蹴る。

反応が鈍くなった。

足首を踏み砕く。

悲鳴をあげて意識を取り戻す。

殴る、蹴る。

気絶する。

足首を踏み砕く。

殴る、蹴る。

30分ほどした。

何の反応もなくなったので膝たちさせる。

盾からヒートソードを抜き、首をはねる。焼き切ったため血は出な  
かった。

本当に、心からクスだった。

次の標的はドイツ軍基地にいるオリ主2人だ。

## 第4話(1)(後書き)

一応言つときますが、作者はオルコツ党です。

シャルロツ党じゃないです。

感想、リクエスト、問題指摘、なんでもいいのでよろしくお願いします。

今回の戦闘は八割趣味。

第4話(2)(前書き)

長いです。

## 第4話(2)

オリ主と自分でもっとも違う点は人間であるかないかだ。

社会に溶け込めるといふのはオリ主の一番の武器だろうと思う。

そんなことを考えながら、クルーゼ専用ディンでドイツ軍基地を上空から偵察する。

自分以外にも何機かのディンが偵察の為に飛行している。

今回のオリ主2人は赤ん坊から産まれてきた為、無理にでも殺す必要がないのだ。

一人は女でこの基地で大尉をしている。26歳独身。

もう一人は男。こちらは大佐でこの基地の司令官。37歳。子供二人。

この二人の人格を調査し、必要ならば殺す。

それが今回の任務。

女の容姿はセミロングにした茶髪にたれ目に泣きほくろ。

おっとり系の美人と言えるだろう。

だが男の方は驚いた。

ドイツだ。

どうみてもヘタリアのドイツだ。マッチョ。

この二人の事を調査してわかった事がいくつかある。

驚くべき事にこの二人、IS適性がかなり低い。

その代わり女は射撃能力が、男は格闘能力と書類処理の速さがが化け物だ。

言動等からオリ主であることは確定している。

一ヶ月間の調査の結果、この二人については保留にした。

一応監視はするし、何かあったら抹殺するが。

だがその必要はないだろうと思う。

女の方はラウラを始めとする少女達のお母さんのポジションで、かなり懐かれている。

ただ、一度幼いラウラに抱きつかれた時に鼻血をだしていたので要

注意だ。

男の方は、この基地でかなり頼りにされているらしい。

一度、ラウラを含む少女等に薬物投与によるIS適性の強化する計画が軍で検討された。

男はこれに激怒し、あらゆる手を使い、この計画を阻止。さらに発案者を左遷に追い込んだ。

だがこの男の妻。

かなりの美人だ。金髪のショートヘアでスタイル抜群。性格もよく、家事も万能。

.....。

この日、男は『なぜか』急に転んだり、トイレのドアが開かなかつたりと、『不思議な』事がたくさん起こった。



まだ建設が続いている月基地で、新たに開発された『あれ』を使いたかったが、今回は見送るしかないらしい。

調査のために島から此方に来ていたザンジバル級に、調査用の機材を運び込みながら少し落胆する。

『あれ』は、研究の結果、原作とほぼ同じ能力を発揮できるが大きすぎる為、対艦用、又は攻城戦用に開発された物。

ザンジバル級の格納庫に眠る機体を見上げ、他の活用法を考える。

その時。

基地から爆発音が響いた。

この日は久しぶりに帰宅するはずだったが、あの書類をまるでやらない女のせいで深夜まで仕事が終わらずにいた。

妻には電話で遅くなると連絡した。妻は笑って許してくれたが、この埋め合わせはいつかしなければ。

そろそろ0時になる頃、ドアをノックもせずになが入ってくる。

「はいこれ。最後の書類。」

独特の間延びした口調。

お互いに同じ秘密を持つ女だ。

「ノックくらいちゃんとできんのか。」

「うるさいわね。小さい事にこだわるんじゃないわよ。ドイツのくせに。」

「だからドイツとよぶなとあれ程」

言い終わる前に爆発音と振動が基地を襲った。

S i d e o u t . . . . .

デインで飛び立ち、偵察に行く。

基地からは断続的に爆発が起きている。

攻撃されているらしい。

攻撃地点を探す。

……見つけた。

戦車だ。ソ連の古い戦車が基地の東から侵入したらしい。

さらに装甲車や大型トラックから顔を隠した兵士が出てきている。

その上を攻撃ヘリが飛び、機関銃を撃っている。

だがおかしい。

この基地を襲撃するにしても数が少なすぎる。

基地からはサイレンが鳴り響き、迎撃が散発的にだが始まっている。

倉庫の影から対戦車ミサイルが放たれ、攻撃していたヘリに命中。

墜落し、爆炎と破片を撒き散らす。

この基地の兵士は錬度が高い。

それこそ、俺がわざわざ『あれ』を出すほどに。

デイン2機を引き連れ、降下する。

侵入した兵士の一人を鷹のように攫う。

兵士は悲鳴をあげるが爆発音と誰かの断末魔の叫びに掻き消える。

喧騒から離れた場所に降ろし、強力な自白剤を飲ませる。

この自白剤、強力な代わりに飲んだ人間の精神を壊してしまう。まさに諸刃の剣だ。

この兵士によると、襲撃者は亡国企業らしく、秘密兵器があるため、あの装備らしい。

目的はこの基地にあるISのコアと適合者の誘拐。

それを聞くとその兵士の頭を撃ち抜く。

そして待機しているザンジバルに命令を出そうとした瞬間。

襲撃者達の後ろに巨大な物体が召喚されていく。

その物体は巨大な人のような形になる。

色はベージュで、短い足に、太い胴体。肩幅は大きく、太く長い腕がある。体の割に頭は小さく、目のように赤い光が灯っている。

と、その巨人の口、胸、肩からビームが放たれ、基地の施設を焼く。一緒に亡国企業の兵士も消滅しているが、気を遣う様子がない。

基地の兵士に動揺が広がる中、巨人のスピーカーから声が発せられた。

《アハハ 最高だよ！！まさに僕にふさわしいISだね！》

そんな言葉を発しながら巨人が歩きだす。

基地からは対戦車ミサイルや、機関砲が放たれるが傷一つつかない。

その様子を見ながら、ディンからリンクを切る。

奴はISといった。

だが、あんな巨大なISは知らないし、存在しない。  
確実にオリ主だろう。

遊撃隊に出撃を命じ、俺は『あれ』にリンクをつなぐ

ザンジバル級の格納庫に緑の光が灯る。

巨人から再びビームが放たれ、迎撃していた装甲車を吹き飛ばす。

《アハハ ねえ、どんな気持ち？全く歯が立たずに、蟻みたいに潰されるのは？》

と、巨大ISの視界に、ドイツ兵に援護されながら避難する少女達が映る。

《アハツ 逃がさないよ！》

巨人の腕から機関砲が撃たれ、少女達の近くに着弾する。

動きの止まった少女達に近づいていく巨人。

少女達にその太い腕が伸び、少女達に届く瞬間。

巨大なライオンが巨人を跳ねとばした。

巨大なライオンは跳ねとばされた巨人と少女達の間に着地する。

跳ねとばされた巨人が起き上がろうとしているのを見て、ライオンが変形した。

人型になったライオンは駆け出す。

起き上がったばかりの巨人を蹴り、飛び上がって、叫んだ。



『ファイナルフュージョン!!!』

その声に応えるように、地面からドリルのついた物体が飛び出し、何処からか新幹線が飛び出し、空からステルス機のような物が飛来した。

それらは人型になったライオンの周りを飛び、合体した。

『ガオ ガイ ガー!!!』

その言葉と共に現れたのは漆黒の巨人。

無数の爆炎に照らされながら二体の巨人が対峙する。

先に動いたのはベージュの巨人。

口、胸、肩からビームを撃つ。

漆黒の巨人はそれに左手をかざし叫ぶ。

『プロテクトシールド!』

それだけでビームは弾かれた。

今度は漆黒の巨人が動く。

『ブロウクンマグナム!』

その言葉と共に漆黒の巨人の右腕が飛び出し、ベージュの巨人の頭に命中。

ベージュの巨人はその衝撃にひっくり返るように倒れた。

その轟音で茫然としていた女が我に返り、少女達の誘導を始める。

と、その先から襲撃者達が現れる。

女はとっさに少女達を守るように身構えるが、次の瞬間には襲撃者

達は蜂の巣になっていた。

驚きながら襲撃者達を撃つた人物を探すと、近くの倉庫の屋根に人影があった。

そこにいたのはグフカスタムだった。

更に、現在基地の至るところで似たような事が起きていた。

上空からデインが亡国企業の兵士を撃ちまくり、ヘリは次々とフラッグやイナクトに取りつかれ、爆散する。

戦車をストライクダガーのビームライフルが撃ち抜き、装甲車がグフカスタムのガトリング砲に蜂の巣になる。

更に兵士達の後ろからザク？F2型の中隊が包囲網を敷き、退路を断つ。

いつの間にか攻守は逆転し、兵士達は追い込まれていた。

起き上がった巨大ISがそれに気づき、そちらに顔を向ける。

そこにガオガイガーで突っ込む。

巨大ISがこちらを見て迎撃しようとする。

口から放たれたビームをジャンプして避け、その頭に膝蹴りをたたき込みながら叫ぶ。

『ドリルニー！』

ドリルがシールドを突破し、口のビーム砲を破壊する。

口から火花を散らしつつ、巨大ISは怒ったようにビームを撃ちまくりながら近づいて来る。

ビームを避け、時にはプロテクトシールドで受け止める。

巨大ISは接近してきた勢いのまま、右ストレートを叩きつけてくる。

それを左腕で弾き、カウンターを叩き込む。

巨大ISはよろけるように下がる。

その胸を蹴り、距離をとる。

そして技を発動する。

右手には攻撃エネルギーを。

左手には防御エネルギーを。

『ヘルアンドヘヴン!!!』

両手を胸の前で結合させながら、呪文のようなキーワードを呟く。

『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……むん!』

そのキーワードで内包されていたエネルギーが解放され、電磁竜巻が発生。

電磁竜巻『EMトルネード』は巨大ISを無防備な姿で拘束する。

結合させた両手を突き出すように構え、地面を滑るように突撃する。

『ウイイイイタアアアアア!』

巨大ISの胸に両手が突き刺さる。一瞬の抵抗の後、めり込むよう

に貫いた。

胸から腕を引き抜くと巨大ISは崩れ落ち、次の瞬間に爆発する。

爆発を背景に立ちながら、こっそり右手で引き抜いていたオリ主をひねり潰す。

MS隊もあらかた片付いたらしく、撤収が始まっていた。

MS隊が撤収し、ザンジバル級が離陸する。

後を追おうと離陸の準備をする。

何故ならドイツ軍に包囲されつつあるからだ。

近くの基地から応援も向かっているらしい。

包囲去れる前に離陸。飛び立つ。

何機かの戦闘機が追ってくるが、雲に入ると同時にECSを展開。

姿を消した。

ドイツ  
Side転生者

あの後、敵兵を殲滅した集団が消えてしまった為、漆黒の巨人を包囲したが飛び去ってしまった。

あの巨体でどうやって飛んでいるのか知らないが、此方の戦闘機を振り切り、雲の中に入ると同時にレーダーからも消えた。文字通り雲隠れしてしまったようだ。

この事件の後始末の為に私の休暇は無くなり、書類処理に忙殺されている。

妻には軍機に入らないように、帰れないことを伝えた。こちらを責めもせずに心配してくれた事に感動した。今度何かプレゼントしよう。

書類処理していると書類が足りない。調べるとまたあの女だ。

今日こそ基地司令としてガツンと言ってやらねば。

あの女の居場所を通りかかった尉官に訪ねると、またラウラ達といふらしい。

女のもとに行き、ドアを開ける。

「おい！書類は」

「あら？クラリッサ何みているの？」



「日本のアニメというものです。」

「なにになに〜？どんなの〜？」

すると少女はノートパソコンにささっていたヘッドホンのコードを抜く。

途端に流れだす音楽。

《空に〜 そびえる〜 黒鉄の城〜》

「え…？」

《マジンガ〜 ゼエット！！》

「お、面白いの…？」

「はい！とっても！あ、でもマジンガーZだけじゃないですよ？ザブングルやダンバイン、ゲッターロボも面白かったです！ファフナーは……」

「な、何でロボットばかりなのかしら〜？」

「この前のロボットの合体が格好よかったからです！」

「イ、イヤアアア！？」

結局、女の努力により、ロボットオタは回避。しかしその代償にア  
ニメオタに目覚めてしまったらしい。

S i d e o u t . . . . .

第4話(2)(後書き)

どうしてこうなった。

ガオガイガー出ただけでこの量。

かなり疲れた。

感想、指摘、よろしくお願いします。

第5話（前書き）

今回は短め。

後、作者がテスト。

## 第5話

ガオガイガー事件から三日後、ドイツ軍は基地襲撃事件と謎の武装勢力の存在、そして神出鬼没の巨大ロボットを公式に発表した。

当初は嘘だと言われたが、撮影された写真や映像が本物だと分かる  
と、各国のメディアは飛び付いた。

ワイドショーやネットでも取り上げられ、ドイツ軍の自作自演から  
宇宙人説までとびだし、世間を賑わせた。

それを見ながら思う。

やっちまった…。

だが神出鬼没の巨大ロボというニュースに目が向き、謎の武装勢力は見事に霞んでいたのは不幸中の幸いだった。

各国政府は諜報機関を使い、色々調べているらしい。

らしいというのはここしばらくはずっと月とメサイアに引きこもっているからだ。

テレビや政府はどうでもいい。

警戒しなければならぬのは篠ノ之束だ。

篠ノ之束がこちらに気付き、ハッキングしてきても勝てる自信はあ

る。

天才といっても所詮は人間。一斉に百単位でハッキングすれば勝てるだろう。

だがこちらの情報は少なければ少ない程いい。

テレビみたいに自分の技や能力を説明するようなバカではない。

月で地球のニュースを見ると謎のロボットの話題は少なくなっていた。

代わりに目立つのは第1回モンド・グロツソの話題。

各国メディアは自国の代表を報道し、ワイドショー等では対戦相手を勝手に解説。何の根拠もなく『勝てる』と話す。

一夏が攫われるのは第2回のモンド・グロツソだったはずだが、オリ主の介入でかなり原作から離れている。

未だ各地で原作キャラを護衛しているMS隊の戦力にてこ入れをする事を決め、新たに開発したMSを地球に送る。

月基地は約半分が完成。

戦艦用のドックやMS開発工場が稼働している。

つい先日、オークエンジェル級一番艦、オークエンジェルと二番艦、ドミニオンがロールアウトした。

今回地球に送ったMSもこの月基地で開発された物だ。

送ったMSは、

バクウ…12機

ドム…6機

ザク陸上高機動型…3機

ウイングダム…15機

ガズウート…15機

グフイグナイトド…20機

ザムザザ…1機

アッシマー…6機



と、かなりの数を投入。

モンド・グロツソというイベントには確実にオリ主が出張ってくる。

それを殲滅する。

だが同時に大衆の前に姿を見せてしまっだろう。

…少し検討するべきか。

いや、M9を開発しよう。ECSは実用化しているし、MSの技術を流用すれば短期間で完成させられる。

ラムダ・ドライバはまだ研究段階なので、今回はアーバレストの出番はないな。

M9は完全な陸上兵器で、圧倒的な機動力と武器を持つISが相手だとかかなり不利だが、ECSを使った隠密性と、搭載された電子兵装はかなりのものだ。

何せ電子兵装だけで本来なら数億円だ。

だが時間がない。

生産ラインをフルで使っても用意できるのは5、6機だ。

何があってもいいようにMS隊の準備もしておこう。

今回は徹底的に裏方にまわる。

決して表に出ず、姿を隠し、敵を後ろから襲う。

卑怯と言われようが気にしない。

オリ主が大会に介入する前に見つけだし、殺す。

ガオガイガーはもしもの時の囷に持って行くこと。

そうだ、ついでにあのMSを開発しよう。

さて、忙しくなるな。

第5話（後書き）

かなり短いですね；

次から頑張る！

第6話(1)(前書き)

遅くなつてすいませんでしたああああ!!OTZ

モンド・グロッシン編の第1部というか前編ツス。

## 第6話(1)

第一回モンド・グロツソ  
者決定戦。

世界で初めて行われるISの王

そしてISを使えるのは女性だけで、不思議なことに各国代表は美人ぞろい。

後は言わなくともわかるだろう。

モンド・グロツソの開催地は物凄い数の人で込みあっていた。

入場券は既に売り切れ、ここぞとばかりに出店が立ち、各店は関連グッズを店先に並べる。

裏では賭けも行われているらしい。

モンド・グロツソはオリンピッククを越える経済効果だそうだ。

実際そうだろう。

数億する戦車も、十数億する戦闘機も、数十億する戦艦も、ISには勝てない。

ミサイルが通用しないのは《白騎士》が証明してみせた。

つまりISの強さはその国の強さ、ISの性能はその国の技術力の高さ、この大会の順位は国の順位と同じだ。

弱ければなめられる。

それは外交にも響く。

だから各国のこの大会への力の入れようは半端じゃなかった。

ISの開発はもちろん、選手の着るISスーツや、対戦相手の戦力分析、選手の体調管理、あらゆることをした。

選手もこれだけされて悪い結果は残せない。

ISの操縦、訓練、模擬戦、戦術研究、そしてそれらを応用した訓練。

大変なのは彼女達だけではない。

不正を防ぐために国際モンド・グロツソ委員会が設立。公正な審判ができる者を選抜、及び教育を行う。

さらにルールや禁止事項を設定、各国に通達まで行う。

こうしてモンド・グロツソは始まる。

結局のところ、開発できたM9《ガーンズバック》は4機だった。

それは俺が開発させたMSのせいだ。

M9の兵装はほぼ全て実弾兵器だし、高機動戦をするISの相手は難しい。別にできない訳ではないが。

それにECSはエネルギー消費が激しい上に、オゾン臭がするのだ。

だからMSを一機作った。

作った機体はGAT X207『ブリッツ』だ。

ミラージュコロイドを使用する機体で、偵察・近接戦闘を得意とする。

武器が右腕のシールドにまとめられていて少し使いづらいがしかない。



M9が4機とブリッツの、合計5機が今回の作戦に参加する機体だ。

他のECSを搭載させたMSは体がでかすぎるので、わざわざスマートなフォルムのM9を作ったのだ。

M9を2機小隊で2つに分け、ブリッツは単独行動をする。

M9はビルの屋上などからオリ主を探し、人目のない場所で排除。

モンド・グロッソの試合会場はブリッツで行う。

開催都市から少し離れた山にもザンジバル級が3隻、MSを格納して待機済みだ。

行動を開始して一時間程過ぎた時、M9小隊の一方から連絡が来た。

内容は『不審な行動をとる人物を確認したため後を追うと、モンド・グロツソの開催中に爆弾テロを行おうとしているらしい。しかしそこにオリ主はいないためどうするべきか判断して欲しい』というものだった。

それに答える。

『殲滅せよ。』

M9小隊はその命令に従い、テロリストの拠点を襲撃。

地元警察が爆弾テロに気付き、拠点に突入した時には生きている者はいなかった。

あの後も、見つかるのは麻薬密売者だったり、強姦魔だったりと、

なかなかオリ主が見つからない。

麻薬密売者は通報し、強姦魔はケツから口まで串刺しにして山に埋めた。

だがおかしい。

まるでオリ主が現れない。

ISの待機状態が見つかりにくい形か、ISについての事を喋っていないか。もしくは両方か。

あとあるとすればオリ主のISに高いステルス機能がついているかだが……これが一番可能性が高い。

もしも相手がECS並みのステルス機能を持っていたらかなり厄介だ。

こちらが確実に後手に回る。

ブリッツを試合会場から開催都市の路地裏や、ビルの間等、人気の無い場所や、ホテルのベランダやバルコニーを監視させる。

……いた。

ISをつけた男が何もないとこから急に現れた。

やはりステルス機能搭載機か。

それにしても高そうなホテルだ。

どこからそんな金を手に入れたんだろうか。

部屋を確認した俺はそのホテルの屋上に行く。

そしてそこから飛び降りる。

落ちながら左腕に装備していたグレイプニールを構え、撃ちだす。

グレイプニールはベランダの柵に当たり、掴む。

落下速度が一気に落ち、ホテルの壁が迫ってくる。

そこでグレイプニールを柵から放させ、一つの部屋のベランダに着地。

オリ主の部屋の二部屋隣。気づかれないように足音に注意して、オリ主の部屋を覗く。

シャワーを浴びてるらしい。

窓をビームサーベルで溶断し、中に入る。

バスルームに向かい、中の様子を伺う。

『  
』

気付いている様子はない。

左手でバスルームのドアを開け、驚いて振り返ったオリ主に右腕を向け、ランサーダートを撃つ。

反応仕切れなかったらしく、オリ主はバスルームの壁に3本の槍で縫いつけられた。

ランサーダートをオリ主から抜くとおびただしい量の血が流れた。

バスルームから出て部屋を荒らす。

強盗に見せ掛けるために現金を奪い、ベッドの上にあったISも持ち去る。

再び窓から出ると飛び降り、グレイプニールを使い着地。離脱した。

ISは壊さずに研究する。こちらが気付かなかったステルス機能に興味があるし、もしかしたら新技術が使われているかもしれない。

奪った現金をビルの上からばらまきながら考える。

だが見つかったオリ主はまだ一人だ。

MS隊も使用して搜索する必要があるだろう。

MS隊の出撃を決め、待機させていたザンジバル級に命令を送ると、試合会場に戻るためにバーニアを噴かした。

第6話(1)(後書き)

どうでしたか？

ご指摘があったら是非ともよろしくお願いします。

今回はあんまり面白くなかったですね；

次は頑張る！…たぶんきつと恐らくね。



第6話(2)(前書き)

一カ月ぶりの投稿。

…やめて！石投げないで！

## 第6話(2)

あのオリ主を殺した後は探索をMS隊に任せて、ブリッツで試合会場の監視をしていた。

探索といっても上空を飛行し監視する程度。

M9には劣るが無いよりはましだろう。

試合はちょうど第二回戦が終わるところだ。

対戦しているのは日本代表とイタリア代表だ。

日本代表の織斑千冬が雪片を構え接近。

イタリア代表は右手に持ったマシンガンを連射し、織斑の回避先に腰の両側に付けられたレールガンを撃つ。

織斑は身体を捻るようにレールガンを回避し、イタリア代表に突進する。

イタリア代表はマシンガンで迎え撃つが、織斑は気にせず突っ込み、雪片でイタリア代表を逆袈裟に斬る。

イタリア代表は斬られながらナイフのような物を召喚し、振り下ろされた雪片を受け流す。

織斑は受け流されても体勢を崩さず、冷静にイタリア代表の突きを捌く。

イタリア代表は距離をとろうとするが、織斑は更に間合いを詰め、胸・頭・胸の三連突きを放つ。

イタリア代表は最初の胸に一撃が入るが、頭を横に倒し、後ろに飛び退くようにして後の攻撃を躲す。

その場に織斑とグレネードを残して。

グレネードが爆発し、激しい炎と音を撒き散らす。

イタリア代表はマシンガンを構え、爆煙を見張る。

次の瞬間、イタリア代表の更に上の爆煙から白い機体が飛びだし、一気に急降下。

イタリア代表があわててマシンガンを頭上に向け撃つがその横を織斑が斬撃と共に駆け抜け、イタリア代表のシールドエネルギーが0になった。

試合終了のブザーが鳴り響き、歓声が巻き起こる。

各メディアも興奮した様子で日本代表の勝利を伝える。

実際、裏で行われている賭けでも日本代表は大穴扱いで、一番人気はアメリカ代表だ。

その理由は織斑のISの武器が雪片のみだということ。

『いくらISの扱いが上手くても、近接戦しかできないのでは意味がない。』

それが一般的な認識だった。

だからこそこの場にいる大半の人々は驚愕した。

イタリア代表は決して弱くなかった。

むしろ実力的にも、ISの性能的にもかなり上位の部類だった。

なのに負けた。

人々は自らの常識を打ち破るISに驚き、それを使いこなす織斑千冬に驚き、歓声をあげた。

さっきの試合で二回戦が終わり、三回戦は明日になるらしい。

出口に向かう人々を見下ろしながら、オリ主が混ざっていたりしないか確認する。

月では以前に涵獲したISを研究し、オリ主を感知できるリーダー、もしくはそれに近いものを開発できないか研究中だ。

それまではこうして人海戦術でオリ主を探すしかない。

だが正直、これだけの人数の中からオリ主を見つけだすのは不可能に近い。

それよりはオリ主の行動を予想し、それに合わせて動いた方が現実的だろう。

というわけで。

ブリッツで選手控え室の出入口を監視し、都市の監視をMS隊に任せてM9を各ピットに向かわせる。

オリ主の目的はどちらかというモンド・グロツソより選手達だろう。

そう予測し、選手や関係者用の出入口に来たが、かなりの数のマスコミやファンが押し掛けており、見つけるのは無理そうだ。

だがよくみると護衛だとわかる人間があちこちに確認できた。一般人とは身のこなしが明らかに違う。

だがもしオリ主を相手するとなると役不足だ。

MSで狙撃するか？

そう思い近くのビルの屋上等の狙撃に適したポイントを上空を偵察飛行していたフラッグに確認させると、当たり前のように警備されていた。

……狙撃ポイントからは無理か。

だが普通のスナイパーには無理でもMSは飛行しながらの狙撃など朝飯前だ。

すぐにドダイ改に乗ったジムスナイパー？を呼び寄せた。

それを確認すると、ブリッツからリンクを切り、ザンジバル級に格納しておいたハイネ専用グファイグナイトッドに繋ぐ。

格納庫から出て、ザンジバル級の上に立ち、モンド・グロッソ開催都市の夜景を眺める。

ザンジバル級のECSの隠蔽範囲内なのでグファイグナイトッドのECSは作動させていない。

今更だか自分が誰かの専用機を駆るのは伊達や酔狂ではない。

外見が同じでも他のMSとは性能が違うのだ。

例えば、バーニアスラスターの出力が高かったり、他のMSより整備を念入りに行ったり、ビーム兵器の出力が高かったりと、かなり待遇に差がある。

それは自分がオリ主と単機でやりあう場合があるからだ。

『他より強い機体』と相手に認識させることで相手の視野を狭め、こちらの策にかかりやすくすることもできれば、敵を蹂躪することで相手に畏怖させることもできる。

その為の専用機。

その時MS小隊から通信が入った。



内容は『織斑一夏に対して不審な動きあり。』

その通信を聞くとすぐにグフイグナイテッドのECSを起動させ、  
バーニアを噴かす。

オレンジ色のグフが暗い空へ飛び出した。

## 第6話(2)(後書き)

最近忙しいです。更新はできるだけ頑張ります。

そういえばHGUCでグフカスタムができましたね。

作ったらちょっと興奮しました。

EZ8はいつかしら。

感想、ご指摘は随時募集中です。

よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9662v/>

---

IS 《オリ主削減計画》

2011年9月22日11時42分発行